



映画

映画は私たちが別世界に連れて行ってくれる娯楽のひとつです。昔は人気映画ともなると長蛇の列が映画館をぐるりと囲んだものですが、最近ではパソコンや携帯電話で予約ができるようになるなど、便利に楽しめるようになりました。今回は往年のヒット作を懐かしみながら、映画料金の変遷についてみてみましょう。

入場者が10億人を超えていた  
日本映画の黄金時代

映画は今からおよそ120年前、1895年にパリで、リュミエール兄弟がシネマトグラフで試写を行ったことが始まりといわれています。初期は音声のないサイレント映画で、日本では「活

動写真」とも呼ばれ弁士がストーリーを解説していましたが、1930年代には音声がついた「トーキー映画」が主流となりました。

日本映画の黄金時代と呼ばれるのが1950～60年代にかけてです。黒澤明や木下恵介、衣笠貞之助らが海外の映画賞を次々に受賞し、観客動員数が年間10億人を超えていました。当時、一年間に邦画だけでも400～500本以上の映画が製作され、7000館もの映画館で公開されました。テレビがまだ普及していないころ、映画は主要な娯楽だったのです。

このころ公開された主な作品は、「浮雲」「点と線」「独立愚連隊」。そのほかにも「ゴジラ」などの怪獣映画も数多く製作されました。また、洋画では「三つ数えろ」「ジャイアンツ」「王様と私」などのアメリカ映画のほか、「灰とダイヤモンド」(ポーランド映画)などもヒットしました。

日本映画製作者連盟の資料によると、当時の映画の平均入場料は1958年で64円、1960年が72円。アイスクリームが10円くらいの時代ですから今と比べて相当割安感があったのではないのでしょうか。

ハリウッド映画全盛時代

こうして隆盛を誇った映画も、70年代を迎えるころには下降線へ。上映スク

リーンの数は68年に3814と4000を割り込み、79年には2374と右肩下がりが続けます。一方、興行収入は上昇を続け70年代中ごろには1000億円を突破します。これは、入場者数が減少する一方で、入場料金が上昇したためです。50年代までは60円程度であった料金が、62年には115円、65年には200円台に、そして70年代に入ると300円台と年々上昇し、79年にはついに958円まで上昇。25年の間に約15倍になりました。ロードショーを封切る映画館とは別に、数カ月経つてから、ロードショーの半額以下の料金で見ることができるよう名画座が人気を集めたのもこの時代です。

ところで70年代にはハリウッド映画の大ヒット作品が次々と公開されました。「タワーリング・インフェルノ」「ゴッドファーザー」「ジョーズシリーズ」「ロッキーンシリーズ」など、今でも語り継がれるエンターテインメント作品が目白押し。SF超大作「スターウォーズ」「未知との遭遇」の大ヒットもこのころです。一方邦画は「トラック野郎」「砂の器」「犬神家の一族」「八甲田山」「人間の証明」などシリアスな人間ドラマもヒットしています。

しかし80年代には、映画料金が1000円を突破する一方、スクリーン数が徐々に減り、89年にはついに2000を割り込みます。興行収入も83年をピークに、一時下降傾向となります。



かつては映画を楽しむには映画館に足を運ぶ必要がありましたが、80年代になって、ビデオデッキが普及し映画のビデオをレンタルして自宅で楽しむことが一般的になったこと、さらに、衛星放送やケーブルテレビなど多チャンネル化が進み、テレビで放映される映画が増え、ソファに横たわりながら映画を楽しむ。カウチポテト。スタイルが登場してきたこと、さらに映画以外にも楽しめるレジャーが増えたことなどが、スクリーン数・興行収入の減少の背景といえます。

この80年代にヒットした作品は「スターウォーズシリーズ」「地獄の黙示録」

